

## 復興は人間の絆づくりから

総合戦略部門広報室広報係 林 美果

3月11日に発生した東日本大震災のニュースが日々、報道されるたびに、この未曾有の事態をどう受け止め、刻々と変化する状況にどう対応して良いのかを今も尚、模索している段階であると思う。

福島県調査派遣団は福田学長を団長として、教育・医療・原子力の三分野の教員に加えて事務局職員も同行し、現地調査する目的で結成された。何よりも被災地での声を聞くことで、状況を的確に把握し、その課題を持ち帰って、本学としての対応策を講じることを眼目とした。

5月24日から行われた調査活動では、まず福島県の相双地方を視察し、午後には佐藤雄平福島県知事との面談を行った。

相双地方は福島県浜通りの中北部に位置し、相馬市、南相馬市の2市に加えて、双葉町、浪江町、飯館村などの7町3村がある。被害状況視察では、福島県相双地方振興局 武 義弘局長から災害廃棄物の状況、瓦礫の集積場、相馬港の被害状況等の説明を頂いた。1堤50トンもあるような防波堤が海岸に打ち上げられ、まだ片づけられていない車の数々、再開の目途がつかない漁港、津波が街を呑み、松林や住居が全て流された痕跡が見られた。高村光太郎が智恵子の故郷である福島を訪れ「樹下の二人」を歌った「ただ遠い世の松風ばかりが薄みどりに吹き渡り」という情景はどこを探してもない（写真1）。

それでも、あの3.11から70日あまり経過しており、瓦礫の多くは地区ごとに分別されて集積場



写真1：南相馬市内



写真2：福島県庁にて佐藤知事との面談

に収集され、環境省による放射線量の調査が行われていた。

午後には、福島県庁で佐藤雄平福島県知事と面談し、福田学長はお見舞いの言葉を述べたあと、福島県と同じように原発立地県として、これまでに被ばく医療、原子力安全工学の教育研究を行ってきたこと、さらに今回の事故を受け、一層の原子力防災・危機管理、被ばく医療の機能強化を図るのが、附属国際原子力工学研究所を保有する大学としての責務だということをお伝えした（写真2）。その結果、復興支援に役立つなら幸いだという意向も伝えられた。その後、福田学長は福島テレビ、福島民報、福島民友、NHK 福井放送局、福井新聞社の各報道機関の取材に応じ、派遣団の目的と視察内容を説明した。

福島県知事との面談後、医学部重松教授、酒井教授、木村准教授と福島県郡山市にある被災者避難施設ビッグパレットふくしまの視察を行った。

当時の被災地は各県から多くの者が視察に訪れ、被災者の方がカメラを向けられ疲弊しているとの情報を聞いていた。震災前、人々は人間としての立場を十分に尊重され、一人の独立した社会の一員として存在していたはずである。そういう人たちが自分のプライバシーすら守られない状況に追い詰められて、様々な摩擦やパニックに悩まされて当然である。わずかな段ボールやカーテンを仕切って、他者との境界を作り、生活することの息



写真3：段ボール等で仕切られた生活スペース

苦しさは想像を絶するものがあったと思う。ひとつひとつの言動や心の在りようまで、周囲に筒抜けでは、ノイローゼ気味に陥っても仕方がないと思えた。こうした避難生活では小さな神経が苛立ってしょうがないことが多々あったと考えられる(写真3)。

しかし、人間はどん底の環境におかれても存外たくましく生き抜く力強さがあると実感した。職員と被災者が一丸となって自ら自治をつくり、食事、掃除等生活全般を輪番で運営していた。震災直後は「命を守る取組」を最優先し、現在では、震災で機能を失った自治組織を取り戻しながら「命を育む取組」に向けて邁進されている。

昨今の異常気象を見ていると、どの日本人も地震、津波、豪雨、豪雪に見舞われても不思議ではない状況にある。そういう事態の到来を私たちは日頃から予想し、その時の心構えを常に養っておかなければならないと痛感した。

避難所では、職員の方と被災者との信頼関係は強く結ばれていた。今回のスローガンでもある人間同士の「絆」づくりがこのような状況下では最重視される。私も大学広報という立場から、多くの人の声を聞き、その声に応えるべき道を探っていきたいと思っている。